

I. オピオイドとは : CQ1~CQ5

II. 慢性疼痛のオピオイド鎮痛薬による治療

1. 総論 : CQ6~CQ11
2. オピオイド鎮痛薬による治療の開始 : CQ12~CQ16
3. オピオイド鎮痛薬による治療の副作用 : CQ17~CQ21
4. オピオイド鎮痛薬の不適切使用 : CQ22~CQ29
5. オピオイド鎮痛薬による治療の中止 : CQ30~CQ33
6. オピオイド鎮痛薬による治療の適応疾患 : CQ34~CQ42
7. オピオイド鎮痛薬各論 : CQ43~CQ58
8. その他 : CQ59~CQ61

III. がん患者の慢性疼痛 : CQ62~CQ66

IV. 術後痛 : CQ67~CQ69

経静脈的自己調節鎮痛法：
iv-PCA：intravenous
patient-controlled analgesia

非ステロイド性抗炎症薬：
NSAID：nonsteroidal anti-in-
flammatory drug

CQ67：オピオイド鎮痛薬による治療は術後痛に有効か？

モルヒネ注射液やフェンタニル注射液を用いた経静脈的自己調節鎮痛法（iv-PCA）の有用性が報告されているが、鎮痛効果は硬膜外鎮痛に劣る。

推奨度，エビデンス総体の総括：2B

解説：

術後痛遷延予防のためにも積極的に鎮痛を行う必要があり、オピオイド鎮痛薬を用いた iv-PCA が推奨されている^{1,2)} が、その鎮痛効果は持続硬膜外鎮痛に劣る³⁾。また、悪心、眠気、便秘などの副作用が、離床の遅れ、入院期間の延長につながる⁴⁾、慢性疼痛治療のために術前よりオピオイド鎮痛薬投与が行われていた場合には、タイトレーションが困難⁵⁾などの問題がある。また、オピオイド鎮痛薬の iv-PCA は自己調節を行わない経静脈オピオイド鎮痛薬投与よりも鎮痛効果は優れてはいる⁶⁾ が、iv-PCA のみで体動時の痛みを抑えることは、過度の鎮静や消化管機能回復の遅れ、尿閉などを起こすため、難しく、iv-PCA、非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）、アセトアミノフェン、区域麻酔などを併用したマルチモーダル鎮痛が推奨される^{1,2)}。

参考文献

- 1) American Society of Anesthesiologists Task Force on Acute Pain Management: Practice guidelines for acute pain management in the perioperative setting: An updated report by the American Society of Anesthesiologists Task Force on Acute Pain Management. *Anesthesiology* 2012; 116: 248-273
- 2) POPS 研究会・編: 術後痛サービス (POPS) マニュアル: ポケット版アップグレードのためのプロトコール集. POPS 研究会, 2015
- 3) Werawatganon T, Charuluxanun S: Patient controlled intravenous opioid analgesia versus continuous epidural analgesia for pain after intra-abdominal surgery. *Cochrane Database Syst Rev* 25: CD004088, 2005
- 4) Cashman JN, Dolin SJ: Respiratory and haemodynamic effects of acute postoperative pain management: evidence from published data. *Br J Anaesth* 2004; 93: 212-223
- 5) The Joint Commission on Accreditation of Healthcare Organizations. Sentinel Event Alert: Patient controlled analgesia by proxy. JCAHO, Chicago, 2004
- 6) McNicol ED, Ferguson MC, Hudcova J: Patient controlled opioid analgesia versus non-patient controlled opioid analgesia for postoperative pain. *Cochrane Database Syst Rev*. 2015 Jun 2; (6): CD003348. doi: 10.1002/14651858. CD003348. pub3

CQ68：術後痛のオピオイド鎮痛薬による治療の期間は？

術式によって異なるが、概ね2日程度に^{とど}止めることが望ましい。

推奨度，エビデンス総体の総括：2C

解 説：

中等度の痛みが持続する期間は術式によって異なるが、術後2日程度の場合が多い¹⁾。

アセトアミノフェンや非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）などを用いて、オピオイド鎮痛薬投与を早期に減量し離脱することが推奨される^{2,3)}。

非ステロイド性抗炎症薬：
NSAID：nonsteroidal anti-inflammatory drug

参考文献

- 1) Bonica JJ: Postoperative pain. (Bonica JJ, ed: The management of pain, 2nd ed.) Lea & Fibiger, Philadelphia, 1990; 461-480
- 2) American Society of Anesthesiologists Task Force on Acute Pain Management: Practice guidelines for acute pain management in the perioperative setting: An updated report by the American Society of Anesthesiologists Task Force on Acute Pain Management. Anesthesiology 2012; 116: 248-273
- 3) POPS 研究会・編: 術後痛サービ (POPS) マニュアル: ポケット版アップグレードのためのプロトコル集. POPS 研究会, 2015

CQ69：本邦で術後痛に使用可能なオピオイド製剤は？

フェンタニル注射液，ブプレノルフィン注，ペンタゾシン注射液などの注射製剤がある。術後鎮痛に使用可能なオピオイド鎮痛薬の内服薬や貼付薬はない。また、術後鎮痛としてオピオイド鎮痛薬の内服薬や貼付薬を推奨する根拠となる論文はない。

推奨度，エビデンス総体の総括：1D

解 説：

本邦では術後鎮痛に適応のあるオピオイド製剤は、フェンタニル注射液，レバブプレノルフィン注，ペンタゾシン注射液などの注射製剤のみである。モルヒネ注射液やモルヒネ塩酸塩錠・原末の添付文書には「激しい疼痛時の鎮痛」，コデイン錠・末の添付文書には「疼痛時における鎮痛」という文言はあるが、「術後」の記載はない。その他のオピオイド鎮痛薬の内服製剤や貼付製剤には術後鎮痛の適応はない。